

熊野大和 幻視行

「海」から「天」へ

紀伊半島の熊野三神(日本書紀)神武天皇(天孫)に加勢したという神武の刀剣・熊野の御威に引かれて、奈良県天理市にある石上神宮まで行っていました。話を熊野山中に戻して。

【記・紀】では、物部一族の高倉下が神武軍を救う話のすゝめとして、道案内役として、八咫鳥が登場する。それは吉野・熊野の山道を知り戻った地元の豪族の長老で、彼らも物部一族で、高倉下の指揮のもと、神武支援に動員されたのではなからうか。

八咫鳥が登場する場面を「古事記」に見てみると、いまの言葉ですると、あらまし次のとおりだ。

高木大神(高皇産靈尊)が「ここから先には、荒ぶる神がたくさんいるから、天つ神の御子(神武)をとんとん奥の方へ行かせてはならない。天上から八咫鳥が飛んでくるから、それに注意して進めばいい」といって、八咫鳥を遣わし、それに案内される」といふ。その通り飛んできた鳥を見て、神武は「これは良い夢の通り、大したことだ。祖先の天照大神がわれわれを助けてくださる」と大喜びした。一行は鳥を見上げながら追いかけ、宇陀の地に至った。

③六 八咫鳥

道案内担った聖なる使者

【書紀】は「八咫鳥」として「天」を付けている。対照文庫の注釈は「鳥の大きかった」とを示すものか」といっているが、それは大きな鳥と「いづか」の鳥が描かれていることだ。

天上から高倉下に熊野を落とさせたのは、「古事記」では天照と高皇産靈の二神だが、「日本書紀」には天照の単独指示となっている。一方、八咫鳥を派遣したのは「古事記」では高皇産靈、「日本書紀」では天照、と異なっている。

私は、高皇産靈は物部一族の大本の神ではないかと考えている。その神が神武を助けるよう高倉下と八咫鳥に相次いで指令を出すのだから、八咫鳥も高倉下と同じ一族と考えるのが自然だ。

【高皇産靈】「物部氏」「八咫鳥」を結ぶ糸は、もう一本ある。

「熊野権現の使者」として熊野三山に降臨したとされる八咫鳥の使者は、奈良県宇陀市橋原区高塚の八咫鳥神社の石像は、ワールドカップ記念のサッカーボールを頭に載せていた。



奈良県宇陀市橋原区高塚の八咫鳥神社の石像は、ワールドカップ記念のサッカーボールを頭に載せていた。

奈良県御所市の葛城山麓にあり、弥生~古墳時代の多くの重要な遺跡が分布している。その一角で90年に見つかった鴨部波1号墳は4世紀(古墳時代前期)の小規模な方墳(20×16m)だったが、学界に衝撃を与えた。それは邪馬台国との関係が指摘されている4枚の三角縁神鏡。大原

こぼれ話

平安時代、「熊野三神」の御威に引かれて、奈良県天理市にある石上神宮まで行っていました。話を熊野山中に戻して。【記・紀】では、物部一族の高倉下が神武軍を救う話のすゝめとして、道案内役として、八咫鳥が登場する。それは吉野・熊野の山道を知り戻った地元の豪族の長老で、彼らも物部一族で、高倉下の指揮のもと、神武支援に動員されたのではなからうか。